

三昧聖と墓制の変遷

吉井敏幸

はじめに

- 一 近世における三昧聖の実態
- 二 三昧聖の組織とその形成
- 三 三昧聖組織の動揺と墓制
おわりに

論文要旨

火葬に従事していた三昧聖の研究は単に墓制史研究だけではなく身分制や社会史からも重要な課題である。しかし関係史料が少なくまた公開も困難であるために一部研究が進んでいるとはいえ三昧聖内部の史料だけで研究されているために、一般村落社会の中で三昧聖がどのような位置と役割を担っていたのか明白ではなかった。

本研究では、資料的にも豊かな近世の三昧聖に焦点をあて、近世村落社会の中での彼等の位置と役割を明らかにし、さらに三昧聖の組織の形成過程が墓制にどのような変化をもたらしたかにも注目した。

三昧聖は近畿地方の平野部に展開する大規模な共同墓地である惣墓の周辺

に「垣内村」「枝村」を形成し、年貢免除の特権（除地権）と死体処理の檀那場権を持っていた。中世社会では半僧半俗で遊行的な性格を持っていたが、惣墓が成立し広く一般民衆が火葬を取り入れる一五〜一六世紀に惣墓の近くに定住する。その頃から独自の三昧聖縁起に基づく信仰と組織を持つようになり、次第に除地権などの特権を獲得するようになった。

近世では東大寺龍松院を本山とし、特権の維持に勤めたが、次第に一般村落民との対立矛盾も深まり、後半期には聖業を辞める者も出、そのような所では火葬から土葬に転化した。特に明治維新による三昧聖の特権の喪失によって三昧聖組織は解体し、一段と墓地の土葬化が進んだ。